



冬季オリンピックは多くのドラマと感動を与えてくれた。私にとって特に気持ちを高ぶらせてくれたのはカーリング競技だった。ルールもわかりやすく、映像を通して見ている者にも方策を考えたりする楽しみもあり、選手と一緒に戦っているという一体感は、他の競技にはない独特なもののように思えた。

数年前までは馴染の少なかったこの競技が、ここまで普及してきたのにはそれなりの理由がここにあるのだと、改めて実感したことだった。

速く、高く、遠くへ、そして力と技そのものを競う。そのための努力と技術とを磨き、晴れの舞台上で惜しみなく発揮する。これが競技の本来の姿だったように思うのだが、今ではそれにゲーム性のある種目も多く加えられ、また、かなり激しくぶつかり合う格闘技まがいのものまで多様である。さらには芸術点とかいう分かりにくいものまで含まれるようになってきた。

その点カーリング競技は観ていて気持ちがよかった。何より負けても勝っても事実として誰もが納得できる競技だからだ。また団体競技独特のストーリーも画面を通して直に伝わってくるのは嬉しいことだった。

誰もがナンバーワンを目指し力の限りに戦う。負けても勝っても互いを讃え合う、オリンピックの美しい姿だ。今回のソチにおいても様々な場面で目にする事ができた。スポーツは世界の垣根を超えて人類が一つになれることを、改めて証明してくれたような気がした。

## 高齢になつて思うこと

水野 龍一



あつという間に正月も過ぎ、節分も過ぎた。いよいよこれから光受寺の枝垂れ梅の見ごろを迎える時季となる。私も毎年この時季が来ることを楽しみに待っている。年々梅をご縁として山門をくぐって下さる方も増え続け、光受寺門徒としては喜ばしくもあり、また誇りにも思っている。

さて話は変わるのだが、先日仕事のお付き合いで、ある神社に初詣に出かけたのだが、毎年この時期の神社仏閣はどこも人また人の混みようである。ここもまたご多分に漏れず、大変な混雑ぶりであった。お土産屋さんも食堂も随分と混み合っていた。

私は毎年正月の三が日の内には、光受寺と地元の神社とは必ずお参りに出かけるのだが、近年は、地元の神社や寺に参詣、参拝する人がめっきり少なくなったように思われる。地元にも神社もあり、寺もあるのに、ましてや自分たちの寺もあるのに、なぜ足が向かないのだろうか、高齢になった今、こんなことが気にかかるようになってきた。大げさに言えば、真宗門徒としての自覚が問われる問題だと受け止めなければならぬのではと、思うのだ。

二月一日発行の光受寺通信には「二人になるといつ事」と言う記事が掲載されていたが、「こつこつ一人こせせひ寺に足を運んでいただけたらと思うのだ。一人で生きるという事は、一人になってみなければわからない苦難な道も多いと思うのだが、仏法を通しての出会いには、単なる知り合い、友人以上の深みのある結びつきともなり、少しでも明るい人生が送れる良いご縁になるのではないかと思うのだ。」

何のための寺なのか、誰のための寺なのか。私たち一人一人が自ら足を運び、自らを問うて行く場にしていきたいものだと思うのだ。現世利益にのみ心を砕いて生きている人間の愚かさか思い知らされてくる良い機会になるかもしれない。

春季永代経 三月二十一日金



午前午後 お齋<sup>しん</sup>あります。

法話 午前 福島 覺師

午後 住職

### 聞へんごし事

聞法するといふ事は、学んで知って知ったことを身につけていくことではない。むしろこれまで身につけてきたもの、身につけてきたものを一つひとつはぎ取られていくような歩みでしよう。自分の先入観が壊されていくようなことだと思えます。と、谷豊教区徳蓮寺前任職が法語から読む宗祖親鸞聖人『真宗大谷派宗務所発行』の中で述べておられます。

また「有縁の法」の説明においては、教へてもらうことよりも自ら「自」を超えていく道。思いが破られて行く道。教へてもらったことよりも、言い方を換えれば「聞へんごし事」だ。

聞へんごし事がいかに大切なことであつたかと改めて思い知らされることです。自分の都合のみの日常に埋没している私たちが、聞いていくことを通し、今ある自分を明らかにしていきたいと思ふのじゃ。

## 日帰り研修旅行

—瑞泉寺参詣・五箇山方面見学—

期 日 平成 26 年 4 月 15 日(火)

参加者募集人数に若干余裕があります。お早めにお申し込みください。  
(募集人員は20名から25名としました)。詳細は住職にお尋ねください。



井波別院 瑞泉寺

本願寺5代綽如上人によって開かれた寺。北陸の浄土真宗信仰の中心として多くの信者を集め、越中の一向一揆の重要拠点となった寺院。井波彫刻・建築の粋が集められた見事な寺院。



行徳寺 山門

赤尾道宗が室町時代に開いた寺。

菅貫山門は切り妻造り。江戸時代末の建築。道宗遺徳間も隣接。棟方志功作の道宗像もある。

### 赤尾道宗

室町時代武士の子として、この奥深い赤尾谷の山村に生まれたという。

幼いころから命を慈しむ心の優しさ、他の命を犠牲にして生きなければ生きられない人間の悲しさに気づいていったと言われている。

如来の救いのもったいなさを忘れぬよう割り木の上で眠り、痛さで目覚めるたびに報謝の念仏を唱えたという話は有名である。



妙好人の一人  
浅原 才市

## 「真宗と妙好人」

森 光明

先に、五箇山が生んだ妙好人、赤尾道宗を紹介させていただきましたが、その後、真宗の教義と妙好人の輩出とは、深い関係のあることが分かってきました。

これまで妙好人として名前をあげられた人は、157人にのぼっていますが。そのほとんど全部が真宗門徒です。浄土宗も同じ浄土教ですが、不思議と妙好人はほとんど出ていません。いったいこれはどのような理由によるものか究明が待たれますが、おおまかに考察すれば、親鸞聖人の思想が絶対他力と言われるように、**真宗は徹底した他力思考を根底にすえるところが、特徴であります。**

妙好人は無学文盲の人が多くいましたが、熱心な聴聞を重ねるなかで自力のはからいを厳しく排除し、阿弥陀仏の慈愛にめざめて行かれました。そのするどい感性を生み出すものは、真宗の教えならではのものであり、他力思考の威力を思わずにはいられません。

わたくしどもは、日常、無意識のうちに自力の思考に明け暮れていますが、知識はなくとも高い境地に達せられた妙好人をお手本にして、み仏の慈愛の世界に心を開きたいものと思わずにはいられません。